

鱧鰭同人・インドヒマラヤ遠征報告

岡田 康・花谷泰広・馬目弘仁^{フカヒレ}（鱧鰭同人）

1. ジ布林峰チーム

メンバー 岡田 康 (31)
佐藤映志 (28)

11月の下旬、松本に住む佐藤君から連絡が入る。
「インドのシ布林へ行きませんか。」

唐突だったが連絡が入って30分後にはOKの返事をした。

彼とは思考が似ているシシャークスフィン隊の馬目さん、黒田さん、花谷君たちが参加すると言うのも僕にとっては魅力的だった。

大所帯ではなく気の合う連中と気が向くままに登りたい。

8月下旬に日本を出発しデリーに3日間滞在した後、目的地のガンゴドリ山群に向かった。BCの標高は約4200メートル、高所でのクライミングや余裕のある日程を考慮してBCまでの行程は非常にのんびりしたものだった。

今回の目的はシ布林北壁。アルパインスタイルで北壁を登り西稜を下降というのが今回のプラン。

そして北壁に取り付く前にまず高所順応を兼ねて西稜を偵察することに決めていた。なぜならそこには北壁も含めたルート中でも危惧しなければならないほどのセラックがあったからである。

日本でシ布林の写真を見せてもらった時、驚かされたのはシ布林北壁の写真ではなくむしろ下降路となる西稜のセラックの悪さであった。日

本を出発してからベースに入り、西稜を見るまで佐藤君と僕との間に西稜の話題がのぼらないことはなかった。

9月上旬、BCに入り3日間レストした後、西稜に向けて荷揚げを始めた。これはもちろん高所順応を視野に入れたものである。時間的余裕からか二人とも焦らずのんびり日数をかけながら行った。

荷揚げの最中に見るシ布林は言葉にならない美しさがあった。

9月7日、ひとまずC1予定の5100メートル地点を目指して西稜に取り付く。心配していたセラックはかぶっているように見えるが絶望的ではないようだ。

それより問題は日中の信じられない熱さだろうか。

我々は当初予定していたクーロアールからの取り付きを止め、クーロアール横の岩場を登る。3級・3～4ピッチ。

その後クーロアールに戻り3ピッチで快適なテント場を見つけた。この日はここで泊まり、翌日いくらか荷物をデポしてBCへ下山。

BCに着くとインドアーミーのシ布林登山隊が入って来ていた。シ布林西稜から頂上を目指すという。先日、シ布林上空を旋回していたヘリコプターはインド登山隊の偵察だったようだ。

インド隊のテント場に挨拶へ行く。お互い色々な情報を交換し合う。

9月10日、西稜に向けて出発。先日インド隊と話した際、C1へは岩稜右から取り付いたほうが良いと言われ早速取り付いてみる。問題なくC1到着（約5100m地点）

翌日、C2へ向けて出発。岩稜、ガレ場等、要所でロープを出しながら高度を上げる。この日は荷物が重く感じられ息も切れたが、問題なくC2着（5500m地点）。

時間的にまだ余裕があったので、少しルート偵察を兼ねて上部まで足をすすめる。上部は岩の露出度も高くクライミングも快適だ。5650m地点まで偵察し、C2へ下山。

翌日、3:00に起床するがテントから顔を出してみると雨混じりの雪が降っている。天候が安定していないのだろうか。テントで待機していると雪は完全に雨に変わった。

待機しているが一向に止む気配はない。色々考えたが一旦BCに下りることにした。

9月15日、再びシブリン西稜へ。BC早朝出発、その日のうちに5650m地点まで登り、岩のテラスでテント設営。今日は一気に登って来た分少し疲れたが、体調は良い。

翌日2:00過ぎに起床し、4:00頃出発。前回撤退してから3日間雪が降ったからだろう。岩に雪がたっぷり詰まっている。

高度を着実に上げセラック下に到着。風が強いが天候は良い。

しかしここで岡田が寒さでしばらく動けなくなる。セラック下でテントを張っていたインド隊のポーターであるネパール人に暖かなお茶をいただき再び行動開始。

インド隊の情報に寄れば明日から再び天候は崩れると言う。彼らは衛星電話を持ち、その場でデ

リーにある施設と交信し情報を得ていた。

色々考えたがセラックの上まで行くことにする。

しかしこのセラックは近づけば近づくほど大きかった。セラックを2P登り問題となるかぶったセラックの下へ。

110位のかぶったセラック。下部はアックスが利くが抜け口が白く雪混じりだ。下から見て考えていたルートもとてもじゃないが登れない。

とりあえず一段、休めそうなテラスまで登ってみる。かぶった氷と6000mの標高は結構堪えるがやはりクライミングは心地よい、もちろん怖かったけど。

問題はその後、残り8メートルぐらいだがこれもたっぷりかぶっている。どうしようか色々考えたがこれもとりあえず登ってみることにした。

途中、臆病風に吹かれテンションを入れる。上を見上げると雪混じりの氷のツララが太陽に当たってなんとも美しい。結局登る自信がなく撤退。

力とモチベーションどちらも不足していた。

その後インド隊の天気予報はずばりの中し2日間雨と雪が降り続いた。

西稜を敗退してもシブリン北壁に行くことに変わりはなかった。西稜上のかぶったセラックも上から懸垂で降りてしまえば別に問題はないというのが我々の見解であった。

それよりも問題は西稜撤退後に降った雪だった。BCでも50センチ以上も降っている。だからシブリンではそれ以上に降っているというのが容易に想像できただけに5日以上は待とうと決めた。

アタック日を9月下旬に決め食料とギアを分けるが、次は体調不良となり再び待機。

そうこうしている間に天候はどんどん悪くなり結局北壁への取り付きを断念した。

呆気ない幕切れだった。遠征報告をこのようにまとめ書き記すと本当に味気ないものだけれど、インドで過ごした日々は無駄ではなかったと今でも思っている。もちろんこの経験を生かすも殺すも自分次第。

2年後の同じ11月、次は笑って帰国したい。

(文責 岡田)

2. メルー峰シャークスフィンチーム

インドヒマラヤ、ガルワール地方、ガンゴトリ山群。

ガンジス川の源流に当たるこの地域は、ガンジスの最も聖なる川バギラティー川の水源になっているため、ヒンズー教の聖地として多くの巡礼者が訪れる場所である。残念ながら日本ではネパール・ヒマラヤやカラコルムほど紹介されていないが、ここには世界中のクライマーを魅了して止まない美しい峰みねがたくさんある。毎年世界中からその美しい岩壁を登攀するべく、多くのクライマーが訪れている。

メルーの北東面には屏風のような幅広い花崗岩の岩壁があり、その中でもとりわけ美しく猛々しい岩壁が、今回我々が挑戦したShark's Fin (シャークスフィン) と呼ばれている岩壁である。これまで多くのクライマーによってトライされてきたが、2001年に岩稜の右側を迂回する形でようやく頂上に人が立ち、標高が6300mくらいではないかということが分かった。しかし、岩稜そのものにダイレクトに突き上げるラインはいまだ未登であり、また、その頂上に立つもつとも美しいルートであると思えた。

登山隊の隊長である馬目は、このピークに3度目のトライとなる。過去の経験を生かし、前半は非常に順調だったが、Finに取り付いて3日目に墜落事故が発生、敗退となってしまった。

8月22日出国。予定通りデリーに到着し、現地のエージェント (Ibex Expeditions) のスタッフの出迎えを受ける。快適なホテルにチェックインし、ささやかにインド初日を祝う。

翌日より登山準備に追われる。25日にデリー出発予定ということで、実質2日間で準備をしなければならない。観光を楽しむのはどうやら登山後になりそうだ。朝はホテルでスパシーな朝食をとり、長い一日が始まる。まずIMFに行き、ブリーフィング。細かな規則などの説明があり、リエゾンオフィサーを紹介される。インド空軍在籍のサニーという人だった。彼は軍の登山隊でこの春にコメットという名のピークに立っている。準備は順調に進むと思われたが、我々が取得していたビザがただの観光ビザで、登山では認められないとの事。急遽ビザの変更に多くの時間を費やすこととなる。2日間で無事ビザは変更できたが、現地で購入予定だった食料等をわずか1時間で買い出さなければならず、かなりあわただしい2日間だった。

8月25日、デリー出発。長いバスの旅の始まりだ。登山の玄関口となるガンゴトリまで、今日を入れて3日間、バスに揺られることになる。雨漏りがするバスだったが、初日は舗装された道なのでなかなか快適だった。しかし2日目は峠越えのカーブが連続し、3日目は土砂崩れによる通行止めバスを乗り継いだりと、なかなか思い出に残るバスの旅となった。3日目の深夜にガンゴトリに到着した頃にはみんな疲れた顔をしていた。

ガンゴトリは標高3000mくらいあるので、翌日は高所順応のために費やす。その間にポーターのアレンジや荷物の整理なども進め、着々と準備を整えていくと同時にモチベーションもどんどん上がっていく。それもそのはず、ガンゴトリ周辺は

「ビックウォール」と言っても恥ずかしくないくらい岩で囲まれている場所だった。ここはヒンズー教の聖地であるが、それと同時にクライマーの聖地を感じさせる場所であった。

8月29日ガンゴトリ出発。ベースキャンプのタポバンまでは3日の行程だ。もちろん高所順応を行いながらのスピード。道中は各自のペースでのんびりと歩く。ガンゴトリ国立公園にはゲートがあり、そこで規定の料金を納める。リエゾンオフィサーやエージェントのスタッフがうまくやってくれるので、我々は言われたとおりにお金を納めるだけでよい。初日はチルバスというところで泊まったが、そこからバギラティーなどの山々が見えるようになる。写真でしか見たことがない山々だが、やはり実物は迫力が違う。また付近にはボルダリングに適した岩が山ほどあり、テント場に到着してはボルダーを探して登っていた。高所順応が十分ではないのであまり激しくは登れないが、クライミングに必要な筋肉を落とすわけにはいかない。キャラバン2日目。距離は短いがやや標高差があった。チルバスから約3時間の行程ではあるが、標高が3700mくらいあるボジュバスが今日の目的地。さすがに富士山に近い標高なので、調子に乗ってペースを上げると息が切れる。周囲の山々を楽しみながら、今日も各自思い思いのペースで歩く。ボジュバスからはシブリンが見え、いよいよ山が近くなってきたと興奮気味だ。3日目の8月31日、キャラバン最終日。今日ベース入りする。黒田はボジュバスに順応のためもう一日滞在する。残りの4名でベースに向かう。途中でゴウムクというガンジス川が氷河から姿をあらわす聖地を通る。ここで登山の無事を祈る。ボジュバスからは一気に標高が上がるので、よりいっそうペースを落として歩く。急な坂を登りきったとこ

ろにぱっと広がる草原。そこがベースキャンプのタポバンだ。標高4200m。ババ（ヒンズー教の修行者）が数名住んでいる。シブリンが目の前にあり、その奥にメル。対岸はバギラティーとまるで天国のような場所だ。

9月1日。のんびり起きて朝食。みんな調子がいいようだ。しかし、酸素が足りていないことはすぐに分かる。食料や装備を分けていると頭がくらくらする。典型的な酸素不足。数が合っているか不安になるが、とりあえずよしとしよう。それにしてもここはボルダリング天国だ。順応したら手当たり次第に登りたいものだ。一日遅れで黒田もベース入り。調子は良さそう。これでメンバー全員がベースに到着した。

9月2日よりABCへのルート工作と荷上げが始まる。ルート工作と言うほど大袈裟なものではないが、長いモレーン帯を歩くことになるので、すこしでも楽に歩けるようにルートを確定したい。途中までは登山隊が多いシブリンのルートと重なるため、道は意外と明瞭だ。しかし、メルに向かうにはそこからさらに奥に進まなければならない、ここを通るのは3度目の馬目隊長の記憶を頼りにルートをマーキングしながら進む。崩壊地などもあり気が抜けないルートだが、いままでの経験を生かして効率よくルートを作ることができた。ABCの標高は4850mくらい。ベースキャンプから5時間ほどの行程である。ABCまではポーターを雇ったので、我々は順応に専念しながら無理のない荷上げを心がけた。レスト日を含めて5日間ほどでほぼ全ての荷が上がった。この間にもう1隊、シャークスフィンを目指すパーティーが現れた。基本的に1ピーク1隊のはずだが、我々は中央峰経由本峰というルートでパーミッションを

4. 海外登山記録

取ったために、別の山として受理したらしい。こういうバッチィングは避けたかったが仕方がない。

9月8日に馬目、花谷で一足早くABC入り。翌日より取り付きまでのルート偵察と上部の偵察に向かう。氷河のルート取りも馬目隊長の経験があり、なんなく取り付きに到達した。しかし、取り付きから上部がかなり問題ありと判明。当初はC1予定地にダイレクトに突き上げる雪壁を上げる予定であったが、落石がひどくとても登れるような状態ではなかった。この日何も知らずに2人でその雪壁の偵察を行い、2人とも落石の餌食になるところであった。昼過ぎに一番激しく石が落ちるようだ。たとえ落石がない間にFixを張ったとしても、翌日にはずたずたになっているだろう。ルートを変更しなければならぬ。

9月10日、3人が揃ったところでもう一度ルートを偵察。その結果、雪壁の左側の岩を登ることになった。下部堆積岩が剥き出しのいかにももろそうな岩だが、中間部から上は花崗岩のようだ。何よりも落石から逃れられそうなルートはほかに見当たらない。花谷がトップで3ピッチほどルートを伸ばすが、非常にもろい岩に悪戦苦闘。翌日より波状攻撃で9月12日にC1までルートを伸ばすことができた。ルートにはFixを張り、荷上げに備える。我々は約800mのFixを用意してカプセルスタイルで登ることにした。Fixの数が多いうように思われるが、これより少ないとC1到達もままならない。事実もう1隊は、装備不足と落石のすさまじさを目の当たりにして、早々に登山をあきらめてしまった。

C1直下の岩はかなりもろい部分もあり、5000mを越えた高所で声が出るクライミングを強いられる。C1の標高は5400mくらい。間髪入れずに荷上げも行い、9月14日にC1から上部に必要な

全ての装備、食料の荷上げを終えることができた。翌日からは天気が悪くなり、3日間雨が降り続いた。5000m付近から上部は雪のようだ。ちょうど悪天の周期にレストができた。

9月18日、いよいよゴーアップだ。次にベースに戻ってくるのは頂上を踏んでからでありたい。決意を新たに出発した。翌日はFixを回収しながら登る。個人装備を背負い、回収するたびに増えるロープの重さにだんだん口数が少なくなる。荷上げがなければ快適なクライミングだろうが、そうは言っていられない。C1まで荷物が上がりきった時には3人ともくたびれてしまっていた。

9月20日、上部のルート作業を始める。フィンからまっすぐに落ちている岩のリッジの左側にルートを取る。C1からバンド状の部分をトラバースし、雪面に出る。この雪壁はフィンに近づくほど傾斜が増し、最初は30度くらいだが、上部は50度くらいになる。午前中に手持ちのロープを使い果たし、一度C1に戻ってロープ等を調達してもう一度ルートを伸ばす。午前中は気温が高く、雪がぐさぐさで体力が奪われるが、12時ごろになると太陽が陰に隠れてしまい、急激に気温が低下する。そのため、午後の方が体力の消耗を抑えることができた。順調にルートは伸び、翌日にはほぼ基部までルートを拓くことができた。

この日の夕方から急激に天候が悪化した。

翌日は一日中雪。時々雪かきをしながらトランプ三昧の一日。まさかこんなに天気が悪くなるとは思いもせず、不安になる。しかし、これは序章に過ぎなかった。その日の夜、思い出深い一夜を過ごすことになる。まるで冬の剣を思わせるような雪。一晩で1m近く雪が積もった。夜中もテントを死守するため、何度も雪かきをした。周りの

景色があつという間に変わってしまった。それに雪崩の音。C1だけがこのあたりで唯一雪崩から身を守れる場所だった。眠れない一夜だったが翌朝は静かになってくれた。ルート工作前にこの雪にやられていたら、もう上に行く気力も奪われていただろう。Fixの掘り返しは大変だろうが、雪が落ち着いたら行動はできる。気を取り直して登ることにした。

Fixの掘り起こしはやはりつらかった。しかも荷上げをしながらの掘り起こし。停滞が入ってしまったので、荷上げを1日短縮することにした。そのため、荷物は30キロ近くあつただろう。この高所で30キロはつらい。標高が上がるにつれて傾斜も増すが、ラッセルには変わりない。湿った重い雪でなかなか進まず、まず空荷でルートを作り、そこを荷上げした。

9月25日。ようやくヘッドウォールのベースにポーターレッジを建てることができた。取り付きの標高は約5900m。頂上までの標高差は400mほどである。ここまでの長い道のりは言ってみればアプローチ。ここからが本番だ。翌日からさっそうクライミングを始める。初日は今後のクライミングを考えると勝負の一日になりそうだ。馬目がトップ。黒田がフォローで伸ばす。花谷はポーターレッジに残って水作りだ。3人なのでローテーションを組んでルートを伸ばすことができる。1ピッチ目は顕著なチムニーを登るが非常に困難で、残置のFix等も使いながらのクライミングとなってしまった。岩は硬いが、こここのところの雪で、クラックの中が凍り付いている部分もある。エイドとフリーを使い分けて効率よく進まなければ、時間ばかりが過ぎてしまう。それに12時を過ぎると太陽は隠れてしまう。気温は急激に下がり、素手でのクライミングはほとんどできなくなる。そ

うすると登攀スピードもぐっと落ちてしまう。午前中が勝負だ。2ピッチ目はチムニーをバックアンドフットでこなしてトラバース。ほぼフリークライミングだ。3ピッチ目はきれいなクラックをエイドで進む。雪のバンドの下でローダウン。クライミングシューズでの突破は厳しい。

翌日は黒田がトップ、花谷がフォロー。馬目はルート整備のあと水作り。荷上げもあつたので、ルート工作が始まったのは10時頃だった。馬目がローダウンしたピッチを伸ばして雪のバンドに到達。しかし、前日の馬目の報告通り、雪のバンドから20mくらいはブランクセクションとなっている。チームの中で最もエイド技術に長けた黒田でさえお手上げ。時間ばかりがいたずらに過ぎ去ってしまい、いったん下降することにした。ポーターレッジに戻り馬目と相談した結果、バットフックで前進しようということになった。これから登るルートを変更するのは時間的に厳しい。それにブランクセクションを超えればそこから先はクラックが続いているような感じだ。あらゆる非難を受けても仕方がない。でも、前進したかった。

登り返して馬目がトップで登ってゆく。所々ボルトを打ち、ランナーをとる。一回墜落したが再び登り返し、10mほど登ったところからフリーに切り替える。ビレーしている方が緊張したかもしれない。なんと馬目は10mくらいランナウトしてそこを切り抜けた。もちろん落ちればただではすまないが、フリーはコントロールができるので登れるんだと平然としていた。これには黒田と花谷は返す言葉が見つからなかった。

何とか活路を見出すことができた。3日目（9月28日）は花谷がトップ、馬目がフォロー、黒田がレストだ。顕著なジェードルをカムのかけかえで伸ばす。しかし、20mほど登ったところで突然

体重をかけていたカム（エイダーをかけていたフレンズの#0.5）が抜け、花谷が墜落した。墜落距離はたいしたことなかったが、ケガの状況は左足首に激痛、立つことができない。また、左肘も軽い打撲。これ以上のクライミングは不可能と判断。花谷の様子から、骨折の可能性もあり、早急な下山が必要であった。しかし、場所が場所だけにヘリコプターや救助隊等、第三者が救助は不可能であるので、残った2人による救助が始まる。最高到達点は標高約6150m。先の見通しが立ちだした矢先の敗退となってしまった。

カプセルスタイルであるので、Fixロープは9月25日に建設したポーターレッジより下部にはない。ロープを再び固定しながら下降するが、少しでも早く下山することが先決であった。そこで、ロープ及びその固定のためのアンカーとして用いたギアは全て残置となった。手元にある装備をほぼ全て使い、C1まで下降（Fixは50mロープで約15ピッチ）。

翌9月29日、C1より再びFixで下降（8ピッチ）、氷河上は2人に確保されて四つん這いで進む。この日はABCまで。馬目はベースキャンプに救援を求めるため下降。花谷は黒田とともにABC泊。9月30日、ベースキャンプより、ローカルポーター2名、同じ遠征隊でシブリンを目指していた岡田と昨山下山した馬目が救援のために登山。丸一日かかってベースキャンプに到着した。

花谷はその後、コックと共に10月2日ベースキャンプ出発。2人のローカルポーターに担がれて馬があるボジュバスまで進み、馬に乗って車が入るガンゴトリまで。10月3日、ガンゴトリからウツタルカシまでローカルバスで行き、ウツタルカシの旅行会社で車をチャーター。10月4日デリー着。10月5日夜行便で日本に向けて出発。10月6

日帰国できた。

（文責 花谷）

3. メルー峰北東壁・最右翼ルンゼルート

2004年、10月2日。朝からガスに包まれシブリンの姿は全く見えない。昨日はシャークスフィン隊の一員である花谷が左足の負傷のためコックやポーターに付き添われて下山していった。停滞日はいつもトランプで盛りあがるものだが、めっきり冷えこんできたBCではただ背中をまるめて天候の回復を待つしか術はなかった。私自身はガンゴトリ山群に登山に来たのはこれで4回目になるのだがこれ程天候が悪かったのは今回が初めてだ。9月中旬には2日間で1m程（5450m地点）の驚くべき降雪があった。ガンゴトリを訪れる地元のツアーエージェントに尋ねてみても皆「今年は異常だ……」と口をそろえる。

シブリン北壁チーム（岡田、佐藤）の登攀意欲は依然衰えていないようである。しかし氷雪壁ルートに取り付くのはもはや自殺行為に違いない。朝食後のそれとなく重い雰囲気の中なかで北壁断念の話を切り出し、代替としてメルー北東壁・最右翼の主稜線まで最も短い部分に絞ってルートを考えようではないかと提案した。私個人としてはなんとしてもメルーの主稜線上に立ってその向こう側をのぞいてみたい……。それはもう祈願に近いような気持ちなのだ。北壁チームの落胆は大きいようだが状況がこれでは選択の余地はあまりにも少なく話は午前中にはおおかた決まった。

BCに残る4人全員でのメルー北東壁最右翼へのトライを決定したものの悪天によりさらに2日間の停滞を余儀なくされた。この冷たい雨では準備すら出来やしなかった。

10月5日、待望の晴天がやってきた。準備を始めるとモチベーションはあがる。改めてメンバー

を紹介するとシャークスフィン隊の残党（馬目、黒田）+シブリン北壁チーム（岡田、佐藤）の計4名である。アルパインスタイルで素早く登ってくるつもりだ。最弱点をついたクライミングを考えているので幾分気楽ではある。午後からモレーンの丘に上がりルートを観察するが、壁は真っ白で簡単ではなさそうに思え気持ちを引き締めた。

10月6日、11時前にそれぞれBCを出発、シャークスフィンチームが残置したままのABC（メル氷河上の5850m地点）に向かう。その間双眼鏡でルートを確認する。

ABC到着後にまた一通り壁を観察してルート決定のミーティングをした。ルートは楽しそうな氷瀑が懸かっていて標高差がもっとも小さく最短で主稜線に出られるルンゼに決定した。そしてシュラフ無しのピバークでメル北東峰を往復することにした。

7日、12時30分起床、2時15分にABCを出た。氷河上の積雪にはシャークスフィン敗退の時のトレースが薄っすらと残っているので助かる。途中から膝下くらいのラッセルとなりトレースよりはずれて目標とするルンゼの取りつきを目指す。ヒドンクレバスが点在するのでロープを結び、念のため旗竿を立てていった。最右翼ルンゼの取り付き（h：4950m）で登攀準備をする。4時30分出発。傾斜の緩い雪面を登ってゆく。深くても膝下くらいのラッセルであり雪崩の危険は全く感じない。今度こそ登れるかなあという気持ちと良きパートナーのおがげで息が切れる登高でも気持ちがよい。空が白みはじめるころにはかなり高くのぼっており順調に登っていた。

標高5500m、雪面が終わりいよいよ岩壁帯にはいる。7時30分登攀開始、馬目が1~2Pをリード、傾斜の緩いリッジ状のミックスマットで4級+位だが

岩がもろく、おまけにのっている雪が岩に馴染んでおらずとても渋いクライミングを強いられた。この辺りは赤茶けた堆積岩である。3~4P、岡田がランナウトして緩傾斜帯をすすむ。3Pはアンカーが取れなくて90mのぼした。4Pからトラバースして氷瀑が懸かる狭いルンゼに入った。このルンゼ周辺には多くのフィックスロープが残置されていた。記録では見当たらないが複数の隊が取り付いたに違いない。やはり皆、目をつける場所は一緒なわけだ。5P、なかなか登攀意欲をそそられるウォーターアイスだ。ここから先はこのような氷瀑が連続していくように思われる。佐藤がうまくリードし60m目一杯ロープをのぼした。次の6Pは岡田にトップをスイッチし、佐藤は自分のザックを荷揚げのため5Pのビレイ点に下降していった。その時私は同ルート下降に備えてビレイ点補強用のボルト打ちに、黒田は岡田のビレイに集中していた。アクシデントはこうして4人が自分の事に集中するあまりに状況への配慮が薄くなったことが原因であろう。岡田がアックスを振るっていた際に落した氷の破片が5Pをユマーリング中の佐藤の顔面を直撃、左目の上をザックリと裂いてしまったのだった。佐藤のうめき声に驚き岡田に続いて私も降りていったのだが、かなりの出血と裂傷の深さに愕然としてしまった。考える余地も無くすぐさま下降を決意。幸い黒田の裂傷用の応急テープがうまく出血を止めてくれた。佐藤の痛みは酷いものではなく視力も問題ないということだ。登ってきた岩壁帯をロープスケール60mをフルに使ってダイレクトに下降し3Pで岩壁の取り付き点についた。時刻はまだ13時30分、明るいうちにABCに帰着できそう。うまくいけば今日中にBCにたどり着けるかもしれない。佐藤は岡田にタイトロープにて確保されながら雪

4. 海外登山記録

面を降った。1時間半あまりであっけなく氷河上まで降り切り、17時にはABCに帰着した。少し休憩したのち岡田と佐藤はBCにむけて出発、馬目と黒田はABCの装備類を出来るだけまとめて荷下げすることにして1時間ほど遅れて降った。ABCで装備をまとめる私の心を虚無がすっぽり包みこんでいた。またしても……。そしてその刹那に無力感を通り過ぎ、全てを放りなげしまえと囁きが聞こえた。なんとか思い留めるように気持ちを切り替えて歩きはじめたものだ。暗くなってから吹雪きに見舞われルートを外してしまいヘトヘトに疲れはしたが全員無事に21時頃までにはBCに帰着した。

岡田と佐藤は翌々日（10月9日）には日本に帰国することが出来、私たちの現地エージェントであるアイベックス・エクスペディションのマネジメント能力に大いに救われたと思う。黒田、馬目はその2日後にABCの撤収を済ませたが翌日（10月10日）からまたしても大雪に見舞われ、BCに4日間も停帯するはめになった。気温も非常に低くポーターがBCに来てくれるのかとても心配してしまった。15日、膝までもぐる積雪に苦労しながらポーターがあがってくるのを見たときは本当にホッとした。昼頃にBCを出発、様々な感慨に浸る余裕もなくただただ夜更けまで歩き通してやっとのことでガンゴトリに帰着、何も考えられないくらいに疲れ切るオマケがついて遠征は終わった。

おわりに

2004年の鱧鱒同人隊の挑戦は全て失敗に終わっ

た。その内容は「全力を尽くした結果であり、納得のいくものだ」とはとても言えない。特にメルー北東壁・最右翼ルート（仮称）での事故はすべき配慮を怠ったがために起きてしまった稚拙なミスであった。経験から教訓を得るのはたやすい。しかし経験してみる訳にはいかない重大な問題はいかにして避け得るのだろうか？私達は少々の経験と引きかえに想像力の無さという弱点を山から教えられたようだ。その代償は決して安くはなかったけれども。

自分のことを少し語ろう。今回の失敗はとりわけ残念だった。ある種の呪いなのだろうか？それは自身の性格的問題に根源があるのだろうかときえ考えてしまう。だがそれも夢見る力までをもは奪ってゆかない。一時、私自身かなりの無気力感に包まれてしまったものだがそれも長くは続かなかった。何度挫折を味わおうとも次を考える楽しみとその高揚感の前向きに生きる推進力となってきた。それを支えてくれたのは家族、そして得がたき攀友である。この遠征では愉快で情熱的な仲間と過ごせたことは忘れられない素晴らしい思い出となった。

きっとガンゴトリは天空の城にちがいない。メルー峰やシブリン峰、そしてバギラティなど人生を変えてしまう程の魔力を秘めている。それにとり憑かれてしまうことによってアルパインクライマーとしての度量がせばまってしまおうとも私がかまわない。気の合う仲間と好きな山に行くのが人生で最高の贅沢だ。さあ2006年に再挑戦といこうじゃないか。しっかり稼ごうぜ！